

サクマ企画演劇公演『桜の園の砂丘館』をご予約の皆様へ

2021年9月23日(木・祝)、25日(土)、26日(日)に予定しておりましたサクマ企画演劇公演『桜の園の砂丘館』は新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況や緊急事態宣言・まん延防止措置の状況を鑑み、政府・新潟県・新潟市の方針およびお客様、関係者の健康と安全とを第一に考慮した結果、すべての公演を中止とすることと致しました。公演を楽しみにしていただきましたお客様には突然の変更となりましたこと、誠に申し訳なく、心よりお詫び申し上げます。ウイルス感染予防および拡大防止のため、何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

サクマ企画

この度はサクマ企画演劇公演『桜の園の砂丘館』をご予約いただき、もしくはお気にかけて頂き誠にありがとうございます。上記のご案内の通り、すべての公演を中止にすることと致しました。7月の稽古の後に、関係者と何度も何度も協議を繰り返して参りました。演劇や芸術は人として生きるために必須であり、そういった芸術が心を動かし人に生きる力を与えてくれるものだと思っています。一方で、衣・食・住は生き物として生きるために必要なものであると考えております。そうした考えと現在の新型コロナウイルス感染症の拡大状況を考慮し、何度も何度も考え、関係者と協議をした上で、「公演をするのは今ではない」と判断致しました。公演を楽しみにスケジュールを調整してくださったお客様には心よりお詫び申し上げます。

作品を観ていただきたかった。かつて様々な方の「家」であった空間に再び『桜の園』の家族を砂丘館に出現させる演劇を柴さんが創ってくださいました。企画が始まる前から居心地がよく、自分の家のようにも感じていた砂丘館。企画提案の際に柴さんにも「砂丘館で演劇を立ち上げてみたい」と言っていただきとても嬉しかったことを覚えております。今回の作品は劇場ではない、野外でもできない、この砂丘館だからこそ立ち上がった作品だと確信しております。砂丘館・館長の大倉さんは「砂丘館が家であることを思い出そうとしている」と仰ってくださいました。そんな作品の創作はとても楽しく、お客様がいらした空間はどのように立ち上がるのだろうと心が躍っておりました。お客様に観ていただける状況を何とか作りたかった。手前味噌ではございますが、柴さんが砂丘館という場所に役者、関係者、砂丘館の皆さんと一緒に創ったこの作品は本当に素敵なものです。皆様に届けることができなかつたのは非常に悔しいです。しかし、今は我慢の時だと思っております。それまでは力を蓄えて、その日が来るのを待とうと思っております。公演に関わってくださった、柴さん、大倉さん、出演者・関係者の皆さん、砂丘館の皆さん、公演を楽しみにしてくださった皆様にご挨拶申し上げます。この公演を再び行うことが出来るかは協議中ではございますが、演劇や芸術の力を発揮できる時は必ず戻ってきます。それまで、みなさまご安全にお過ごしください。一刻も早く状況が良くなりますように。

佐久間喜子
サクマ企画 代表

上演されなかった作品の魂はどこに行くのでしょうか。生まれ、育ちつつも、見られることなく生を終えた存在。行き場のない魂はそのまま消えるのでしょうか。それとも新たな何かに転生するのでしょうか。でも、その時その場に残されるもの、いや、そこに自ら残ろうとするものがあるような気がします。それこそが今回、私たちが上演しようとしていた「桜の園」だったと思います。時代に追い出されるでもなく、時代に流されるでもなく、時代に反発するでもない。ただ時代から距離を置き止まり続けようとするもの。それは桜の園の屋敷であり、最後に舞台に残される老僕フィールスではないか。私たちはその屋敷と老僕に着目し、屋敷に残された魂を追体験する「桜の園」を、砂丘館の力を最大限に借りて上演しようと試みました。数年間の企みが消滅し、まるで私たちが屋敷に残された魂のように今は感じます。あの屋敷でお客様とお会いできなかったことを本当に残念に思います。この魂が今後、どこかでふいに転生する機会を伺っていきたいと思います。佐久間さん、俳優、スタッフ、砂丘館の皆さん、関わって下さったすべての方々、ありがとうございます。楽しみにしてくださった方、気にかけてくださった方、またどこかでお会いできるときを楽しみにしています。

柴幸男（ままごと主宰）

構成・演出

綿密なスケジュールリングの中で進められていたこの度の公演を、日々感染者が増える状況での苦渋の思いのなかで中止する決定が、サクマ企画さんによってなされました。「健康と安全」を優先する基本は共催者としても共有するものです。個人的にも、佐久間さん、柴さんから「家である砂丘館で演劇公演をしたい」とお話を伺ったときから、公演当日を楽しみにしていましたので、残念でありませんが、ご理解をお願いいたします。

砂丘館で自主事業を担当する NPO 法人新潟絵屋は、販売を通じて家に絵が持ちかえられ、家を美術の場（魅力ある空間）に各人がすることの意味を大きく考えてきました。砂丘館はまさに家。そこにいつも絵を掛け、自然に眼にさせていただくことを16年続けています。日本に家にはかつて襖や床にいつも絵や花があり、冠婚葬祭も、旅芸人を迎えての公演も行われました。家が文化の場であったことを「思い出そうとしている」砂丘館のありようを、お二人が察知してくださったこと。感謝しています。

見ることがかなわなかった「家での演劇」の新たな公開を、申し込まれた皆さまともども、待つことにします。

大倉宏

砂丘館館長